

モルテン・イェルウエン著 渡辺景子訳  
『統計はウソをつく——アフリカ開  
発統計に隠された真実と現実——』

青土社 2015年 xix + 238 ページ

さとう はじめ  
佐藤 創

統計は観察対象の情報を縮約して示すものである。ただし、ダリル・ハフがロングセラー『統計でウソをつく法』(1968年 講談社、ブルーバックス B-120)にて軽妙に示したように、統計の客観性を確かめずに利用し理解することには危うさが潜む。GDP値を含む国民所得統計という現代社会において特別な地位を占める統計もまたその例外ではないという事実を、本書は鮮やかに描き出している。

物理学と違い経済学には観察対象を計測する気圧計のような機械はない。とくに膨大な人手と時間を投じて集計されるマクロ経済統計には、技術的な問題だけでも、基準年をどう設定するか、家事や自給自足的な活動をどう考えるかなど、その作成プロセスにおいてさまざまな判断が介在する。

このようなマクロ経済統計の性質は経済学者には基礎知識であり、とくに開発途上国の統計作成能力に問題があるという懸念は広く共有されてきた。さらに、開発途上国のマクロ経済統計が疑わしい背景として統計作成能力以外の事情も存在する。本書がナイジェリアの人口と農業生産、タンザニアの国民所得に関する統計を事例にして明らかにしているように、それらの数値は租税や補助金、議員定数配分の基礎となるなど重大な利害が絡むためにその作成過程はきわめて政治的な駆け引きの場なのである。

つまり、マクロ経済統計の作成において恣意性を完全に排除することは困難なのである。実際、本書が世界開発指標などの代表的なデータセットを比較して示しているように(53ページ)、たとえばギニアの2000年の1人当たりGDPは、ある統計では572ドルでサブサハラ・アフリカ諸国のなかで最貧国第7位となっているのに対し、別の統計では2,546ドルで第35位である、というようなことが起こる。

しかし、マクロ経済統計の作成プロセス自体が研究の対象となることはほとんどなかった。そのプロセスを調査することは政治的にセンシティブな問題であり、また経済学者の主たる関心は統計の作成よりもその利用方法にあるため、積極的にこの問題を取り上げるインセンティブは小さいからである。

経済史を専攻する著者はザンビアの中央統計局を訪れた際に国民経済計算の担当者が実質的に1人しかいないその惨状に衝撃をうけ、アフリカ開発統計の作成プロセスを研究対象として据えた。著者は「彼らはいったいどうやって、これらの数学をひねり出したのか？」(7ページ)という問いを手放さなかったのである。

著者は、アフリカ開発統計の質が改善しない背景として、国際社会の側にも問題があると主張する。たとえば、国際社会における「ミレニアム開発目標」の採用や「エビデンスに基づく政策」の重視によって定量的な調査や研究が重視された結果、社会開発指標の収集作成に人や資金が流れ、国民所得統計の作成を担う各国統計局の制度的・財政的な問題はむしろ悪化させしていると指摘する。

また、経済学ではたとえば肥料補助金の有効性を家計や村落レベルで実験室的に研究する手法が近年とみに広まっている。こうした研究が作成して用いる統計は、マクロ経済統計に不可避の、政府が作成することによって生じる問題を回避する。しかし、著書は「ミクロ・レベルの実験は、マクロ経済的データの代わりになることはできないし、そうなるべきではない」(162ページ)と述べ、「政府やドナーにとって実際に重要なのはマクロ的問題」(161ページ)だと主張する。実験室と現実の類似性ではなくその差異こそが重要であり、その差異から生じる諸問題に対してこうしたミクロ的研究の射程は及ばないと著者は指摘する。

著者はアフリカ開発統計作成の惨憺たる状況がなぜ生じているのかを明らかにすべく本書を世に問うた。しかし、それはマクロ経済統計を退けるためではない。その重要性を再確認し、その改善に国際社会や学界も本腰を入れて取り組むべきではないかと訴えるためである。

(アジア経済研究所地域研究センター)